

(九) 専修学院卒業を目指して

出逢い

昭和二十三年二月一日、私は、高野山専修学院三学期の修学のために、名古屋駅から電車を乗り継いで国鉄高田駅まで来ていました。駅には二人の中年女性がおり、コートのえりを立て、頭からは毛糸編みの肩掛けをかぶり、いかにも寒そうな様子です。下り和歌山行きは一時間に一本しか通らないので、三十分余り待たねばなりません。退屈になつた私は、前の二人の婦人に、

「どこまで行かれますか」とたずねますと、「五條です。」と答がかえつて来ました。

「私は高野山まで行きます。」と挨拶をしますと、

「高野山でご修行中の小僧さんですか。私は十年も三輪明神に月参りをしています。」

「それは大変熱心な信心ですね。さぞたくさんのおかげを頂いていなさることでしょう。私も肺結核を病んでいた時に、三輪明神（大国主命）と不動尊に、命がけで拝み、お願ひしました。おかげさまで命を助けて頂き、この通り元気で修行させて頂いております。あなたの頂いたおかげをきかせて下さい。」

二人の婦人は顔を見合わせ「健康がご利益でしょうか。特別につらいこともないから、これといったおかげはわかりません。」

「信仰する者は、神様や仏様の御心に叶うように拝むと効果が大きいですよ。神様や仏様は正しいことがお好きで、悪い行いはお嫌いです。明治天皇の御製に、

『人しつれず 思う心のよしあしも 照しわくらん 天地の神』とあります。

弘法大師の御教えは、体と口と心で罪をつくらぬように日々修行し、体と口と心の三つを仏様に合わすようにすれば、仏様が私達の中に入つてお加持して下さるということです。そうすれば罪が早く清められ、迷いがなくなり、心が豊かになり、健康になり、家庭円満、

人とおつき合いも気持ちよく、家は栄えます。

弘法大師さまは『死んでから仏になるのではおそい。生きている間に仏になり、この現世に極楽のような世界をつくりたい（密厳国土）。そして総ての命あるものを残らず救いあげなければ』と穀物も水も完全に絶ってご入定されたのですよ。御年六十二歳の春三月二十一日のことです。あなたがたも、どうぞ弘法大師様を信じて下さい。』

「私は四国の大島県の生まれで、お大師様のことを少しは知っていますが、深くは知りません。どうかもっともと教えて下さい。」

和歌山行きの汽車の中でも私達の話ははずんだ。五條駅が近づいて来ると、ご婦人方は、「次の日曜日に、高野山のお大師様にお参りに行きます。きっとあなたの所へ行きますから、また有難い話を聞かせてください」と言つて降りて行かれました。

三学期の修学

一月の高野山は嚴冬で、真っ白い雪に包まれた堂塔は一段と莊厳です。雪に滑りながら一の橋より奥の院の御廟に参詣すると、年老いた白髪の婦人と中年の婦人がはだしでお百度参りをしておられます。涙をうかべながら真剣に祈られている姿に、私も思わず立ち止まって、その願いの成就を祈りました。

この雪の中でも奥の院のお参りの人が絶え間ないのは、大師の偉大なる御徳のあらわれであるにちがいない、私も三学期の修行の無魔成就をお祈りし、学院へと向かいました。三期は短く、最後の仕上げです。院生一同、身を引き締め、希望に満ち、各自の志すところに熱を入れています。

私は、修驗と布教をもって迷い苦しむ人々の苦を抜き、樂を与える道を開きたい。冬休み中の断食修行、安城市大見諦禪先生の叱咤（しつた）激励、その後の薬師如来の靈光

拝受、病人をお加持して靈験をえたこと。総て、肉眼で見えぬ仏天の御加護とお導きであることに目覚めていました。

再会

次の日曜日、夜中より降り出した強い雨は朝になつてもやみません。この大雨の中、約束通り、五條の婦人は友人をつれて三人で登つて来られました。「訪ね来る人は菩薩（ぼさつ）の來訪と心得よ」との大見先生の教えを思い出しながら、三人を私の部屋に案内しました。同室の西本君は気をきかして外に出てくれ、小さな囲炉裏に炭を入れたして、熱いお茶を勧めました。

「あなた方は、真に熱心な方々で感心しますが、三宝に帰依していますか。」「三宝とは何の事ですか。」

「三宝とは、①仏様 ②仏様の法(おしえ) ③それを守り修行する僧を言います。いかに熱心に祈っても、この『三宝に帰依する』という仏の門を通らなければ、外道ということになります。

仏は私達の命の御親でありますから、心より仏に帰依しなければなりません。帰依とは帰命ともいい、命が帰るということです。『どうか御親である仏のところへ私の命を帰らせて下さい』と心よりお慕いして、おさがりすることです。

次に、仏様の法(おしえ)を守ることです。いかにおさがりしても、仏様の教えを守らなければ、自分で自分を苦しめ、人を苦しめるのです。仏様が助けてやりたいと慈悲の手をさしのべて下さいましても、仏様の方へ行かず、自分で苦しみを作っていく者は「とんで火に入る夏の虫」のようなのです。

仏様のみ教えは『一切の悪いことをせず、一切の善いことを行い、心を清め、言葉を正し、身体の行いを正しくすること』です。その基本の鏡は十善戒です。十善戒をよく守りましよう。

第三は僧。僧とは一人を言うのではありません。一人は比丘と言い、僧とは仏道を修行する団体を言います。例えて言えば、真言宗の教えを守るお坊さんと信者の団体です。

この三つのどれがかけても仏教は成立しません。これが仏教の一番大切な入り口であり、仏教の命と言えます。これを守れば信者になります。信者になって有難いと思った人は、自分一人の喜びで満足せず、世の中の苦しみ悩む人を哀れみ、信者の道に導き、助けるお手伝いをする事です。

仏様は「総ての人をもらさず救い助けたい」と大願を立て、無限の過去より未来永遠に御修行を続けられています。

宗祖弘法大師は、千百三十六年の昔、私たちを未来永遠に救い上げたい一心でご入定されたのですから、お大師様のみ教えを広めることは、お大師様が大変お喜びになり、ご利益が一層大きくなります。他の人を助けたいと願う慈悲の心が自分を助けるのですよ。

三人の婦人方は、一生懸命私の話を聞いて下さり、これからはお大師様の信者になることを誓われ、喜んで帰って行かれました。

玉川の水行

学院の一日の終りは施餓鬼で、その後は自由修学である。私はこの時間を利用して、奥の院へ何回もお参りに行きました。

玉川の水行場に入り、川の中に座り、百八辺、不動尊の慈救呪をとなえながら持参の小桶で冷水を頭からかぶり、百八の煩惱を洗い流して心身の清浄を願いました。そして、奥の院の石畳の上に風呂敷を広げて座り、

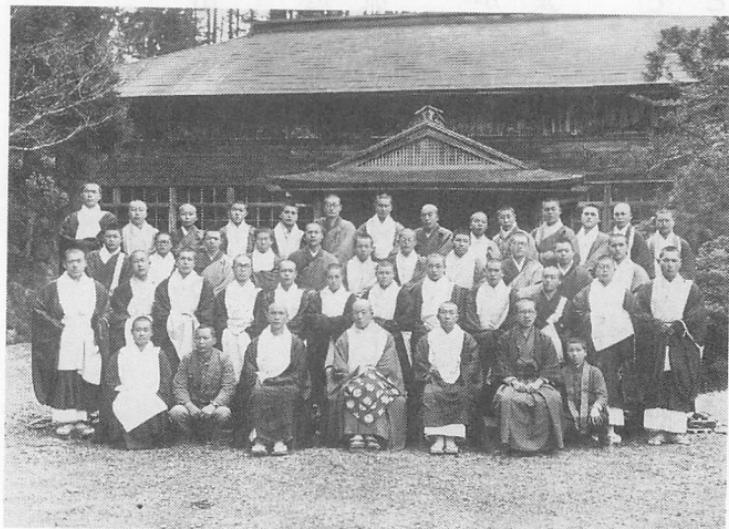
「御仏様のおかげで助けて頂きました。これからは迷い苦しむ人々の救済のためにこの身を捧げます。学浅く、行徳少なき者でございます。大師のお知恵とお力を貸し下さい」と一心不乱に祈りました。

一学期の加行後には、朝四時まで拝み続けて学院にかえったところ、寮監に見つかり「君の熱心さはわかるが、校則は守らねば。」と注意を受けたので、寒中のお通夜は断念せ

ねばなりませんでした。時間が短ければ短いほど真剣になります。

『三月十五日に、学院を卒業させて頂くことになっています。その後奥の院にお籠りして二十一日間の断食行を修行させて頂きたく思います。お許しを得ば、師僧に申し出て、宗務総長の正式の許可を得たく…』

『その必要はない。早く下山して苦しむ者を助けよ』おごそかな声が聞こえました。私はおに熱い涙が流れました。私は地に頭をすりつけてお告げに感謝しました。



高野山専修学院卒業記念 三列目右より二人日本人